心靈研究會の怪

海野十三

青空文庫

その頃の研究

昭和五年から十年頃まで、わが國で、心靈研究がかなり盛んだつたことがある。

外國では、その當時も心靈研究が盛んであり、有名なシャーロック・ホームズ探偵の物語をたくさん書いたコーナン・ドイル翁も熱心な研究家であり、その著書もその頃わが國へ渡來し、紹介された。

アメリカでは、もつと早くから、心靈研究が盛んであつた。そしてそれが詐術であるといふ證明をすることが、通俗科學雜誌の紙面を毎月賑はしてゐた。

わが國では、むしろドイル翁などの研究に加擔してゐた人が多かつたやうである。たとへば、大本教の幹部として知られてゐた淺野和三郎文學士などは、そのひとりであつた。

淺野氏は、どつちかといふと、研究に獨自の立場を取つてゐたやうで、いはゆる心靈研究會や招靈會などの經營には、あまり興味を持つてゐないやうに見えた。

とにかくその頃、心靈研究者が急に殖えた。それは當時の絶望的國情を反映し、信者が日增しに殖えて來たものだと思はれる。

心靈研究會でやることは、第一に、靈媒を使つての招靈問答であり、第二には、やはり靈媒を使つて招靈し、その心靈にいろいろふしぎなる現象を見せてもらふことだつた。第三には、惡い心靈に取憑かれてゐる患者を治療することであつた。これにも靈媒の力を借りなくてはならなかつた。第四には、自分が靈媒となる修行であつた。まづ、當時の心靈研究會のスペクタルは以上の四つであつた。

これによつて分るとほり、心靈研究には、靈媒の良否が直接に影響するのであつた。だから、いい靈媒を探し出すこと、靈媒の修行を積ませることが、心靈研究會の重大なる投資的仕事であつた。いい靈媒には、常に爭奪戰がついて　つた。いい靈媒はたいへん忙しくなり、席の温まる遑もない位であつた。

靈媒には婦人が多かつた。そして彼女たちは、地方に於て奇異を演じ、それがだんだん有名になつて來ると、心靈研究會が聞きつけて都會へ引張り出しに來るといふのが普通の順序であつた。

心靈研究會に興味を持つ人々が、だんだん多く集つて來ると、心靈の科學的考察が盛んとなり、新しい科學の分野にわれこそ先に踏みこむのだといふ篤學の熱心家が現はれ、「心靈電子論」だとか、「心靈四次元論」だとか、「心靈三世説」とかを提唱して體系づけ、心靈の存在に確乎たる裏打ちを施すのであつた。電子論の上つ面だけしか知らない手合は、この論説にころりと參つてしまつて、次には自分がそれを説く立場へ進むのであつた。

理論の方は、山の芋のやうなもので、いくら捕へようとしても、ぬらぬらして、逃げられてしまふが、心靈實驗の物理化學的説明となると、これはなかなかうまく行かず、實驗の條件がどうのかうのとの爭ひが頻發し、揚句の果は、折角會の方へ半分位引摺りこんだ本格的理學者たちに逃げられてしまつたり、惡い場合は、尻尾をおさへられさうになつたりして、結論本格的學者からは見離されるに至つた。

石原純博士の如きは、ずゐぶん長期に亙つて熱心に心靈實驗に立合はれた一人である。其他、現存の權威ある博士達で、心靈研究會へ引張だされた人々は少くない。しかし石原博士が一番熱心のやう

に見えた。

石原博士の臨席が、靈媒にとつてだんだん苦痛になつて來たものと見え、しばしば實驗が不成功に陷つた。そればかりか、暗闇の中に於て、心靈が石原博士の横面を毆つて眼鏡を叩き壞したり、同伴の原阿佐緒女史の扇を心靈が引裂くなどの暴行があり、そこで博士はこれ以上の臨席は危險だと悟つて、それつきり出席されなかつた。博士は、生命の危險を感じたから、手を引いたのですと、私に語られたことがある。

死後の世界

一體心靈とは何であらうか。

それは魂のことである。肉體の中に、魂が宿つてゐる。その魂が、肉體の死後、それから拔けだして、次の世界へ行く。

その魂は、場合によつては元の世界に現はれることもある。

この魂は、この世に肉體が出來る前からあつた。つまり魂は三世にまたがつて存在するのである。

心靈研究者は、さう説いてゐる。

或る一派では、四世にまたがつてゐるといつてゐる。すなはち、前の世、この世、次の世、もう一つ先の世、この四つの世がある。魂はこの四つの世を旅行するものだといふのである。

芝居などで幽靈が姿をあらはし、恨みを含んだ目で、きつと睨み、細い手首でぐるぐると圓を描き『迷うたわい』と血を吐くやうな聲で訴へる。この幽靈も、肉體をはなれた魂であつて、假りに生前の形を生ある人に見せながら、それに乘つて現世へやつて來る。

心靈研究者たちは、そのやうな幽靈は、インチキ心靈であると排斥してゐる。

未來の世、すなはち死後の世界から、現世へ戻つて來て、現世の人と、言葉を交はす心靈は、普通は靈媒の力を借りなければならない。普通はと制限を附したが、靈媒なしに、現世へ現はれる心靈は、いはゆる守護靈といふ修行を積んだ心靈に限るのである。

人間が死ぬと、肉體は亡ぶが、心靈は殘る。その心靈は、いはゆる死後の世界へはいる。

死後の世界へはいつた心靈は、その世界では新參者であるが故に、あたかも現世に於ける嬰兒の如く、甚だたよりない存在である。

普通の場合は、死んだことすら自覺してゐない。そして死の直前に感じた苦しみの中に依然として浮き沈みしてゐる。胃病で死んだ者ならば、「胃が痛い痛い」と叫びつづけてゐるし、肺病で死んだ者ならば「呼吸ができない、苦しい苦しい」と叫びつづけてゐる。

これは靈媒の力を借りて、その心靈を靈媒の肉體に一時宿らせると、そのことがはつきりする。つまり、靈媒の肉體へ、亡靈を招きよせるのである。招靈するのだ。

これを行ふには、靈媒を無我の境に陷し入れるもう一人の術者が要るのが普通である。しかしその靈媒が修行を積んだ人ならば、自分で無我の境に入つて行くから、術者は要らない。

靈媒が無我の境に入ると呻り聲を發する。すると傍についてゐる心靈研究會側の主が、『心靈が出ましたから、話をしてごらんなさい』といふ。尚、『この様子では、この方は、まだ御自分が死んだことを自覺してゐませんな』と、言葉を繼ぐ。

そこでこつちから、靈媒へ聲をかける。すると靈媒が返事をする。

『ああ、誰ですか。苦しい苦しい。ここが痛い』などと身體をひねつて苦痛の色を示す。

『ああ、氣の毒に。この方は肺病で亡くなられたな』と主事が言ひあてる。そして『早く聲をかけてあげなさい。あなたはもう死んでゐるのですぞと教へておやりなさい』と助言する。

そこでこつちは、恐る恐るそのことを告げる。すると靈媒に現はれた心靈は、強くそれを否定する。それから雙方で押問答をくりかへしてゐるうちに、心靈は、はじめて自分の肉體がないことに氣がつく。そこで心靈は、はげしく歎き悲しむ。

死をやうやく自覺した心靈を慰めるために、かなり骨が折れる。こつちはいい加減にくたくたとなる。

が、とど心靈は諦めの境地に達し、生前の好意を感謝したり、現在居る世界の様子をぼつぼつと語り出す。

普通第一回の招靈では、その心靈は、ほとんど闇の空間に置かれてゐると告げる。それが第二回目になると、夕暮ぐらゐの明るさになり、第三回第四回と、回を重ねるごとに、その心靈の環境はだんだんと明るさを増して行く。

何十回に及んだ後は、曇り日ぐらゐの明るさになつたと告げる。そしてあたりの風物について語つてくれる。

あたりは廣々とした野原であること。花は咲いてゐないが、自分が花が見たいと思ふと、その直後にこの野原に美しく花が咲き出でると告げる。机が欲しいと思ふと、野原に忽然と机が出て來る。なんでも欲しいものは、自由に出て來るのださうである。

だが、その心靈は孤獨を告げる。野原に、自分ひとりで生活してゐるのださうである。ただ、いつだか老人の神主さんのやうな人が遠くを歩いてゐるのを見かけたといふ。心靈研究會の主事は、『その神主姿の人こそ、守護靈さんですよ』と、あとで解説してくれる。

それから日が立つと、死因をなした病氣の痛みはとれる。それがとれると、こんどは集團生活にはいる。

はじめは、同じ頃死んだ同性の者だけの集りである。そして知人は一人も見つからないので心細い。しかし孤獨で暮してゐたときよりは賑やかである。

一同は、守護靈さんを師として、毎日修行を重ねていくのである。それはなかなか面倒なことであり、娑婆のやうにいい加減で放つておくことは許されないので、骨が折れるさうである。

やがて試驗の日が來る。この試驗に合格すると、階段が一つ上る。そしていよいよ修行の内容がむづかしくなる。その代り自分の教へ子が成人が出來るし、その世界に於て、行動の自由が少しづつ附與される。

さうなると、心靈は、その世界を方々見物したり、また自分よりも先に死んで、ここへ來てゐるはずの親類緣者や友人たちを探しまはつて出會ふこともある。

それから先は、ますます修行を積み、やがて守護靈さんにまで昇格するのを目標として勵むのである。守護靈さんになるには、普通の心靈では、早くても四百年はかかるさうである。

守護靈さんになると、かずかずの技能が與へられる。一分間に千里を飛ぶことができたり、娑婆へ自由に日がへり旅行が出來たりする。そして守護靈さんだけの第四世へ入籍することが出來、そこでも修行と、後から來る若い心靈たちへの世話の成果によつて、大守護靈となる出世の途がある。そして天下のことは自分の心次第で、

どうにもなるといふ大能力者になる。これが心靈の『上り』である。

自殺した友人のこと

呼び出した心靈と話をしてゐると、はじめは違つた人の心靈が出て來たやうに思つてゐた者も、だんだんにその本人の心靈に間違ひないやうに思つて來る。

その心靈に、『こつちの娑婆の世界が見えるか』また『こつちの顏が見えるか』と質問すると、心靈は次のやうに答へる。

『あなたがたの住んでゐる世界を見たいと思ふが、よく見えません。それは雨戸の僅かの隙間から、うす暗い夜の外景を見るやうなもので、視野は狹く、その上にはつきり見えないのです。しかしあなたのお聲はよく聞えます。修行を積むと、娑婆の世界がもつと明るく見えるのださうですから、修行をはげみませう』

死後の世界の有樣を、こんな風に心靈は傳へる。そして靈の修行は、死後の世界へ來て始めて意味と效驗を生じ、未來の榮達が約束される。娑婆でいくら修行してみても、それは砂で塔を建てるやうなもので、何にもならない。娑婆は、單に幻想の世界に過ぎない。

かういふことを心靈は述べるので、それを信じて自ら生命を縮め、自殺によつて死後の世界へ出發した私の友人がある。彼は勝れた技術者であつたが、心靈研究に凝り出し、本當に價値ある世界——すなはち死後の世界のことだが、そこへ早く乘りこんで、心靈科學を確立させるのが賢明であると氣がつき、そこで自らの生命を斷つたのである。そして私たち友人にも遺言して、一日も早く自分と同じ氣持となり、次の世界へ突入することを諄々として薦めてあつた。

彼の場合、死後の世界へ引きつける重大な力が、その外にもあつた。それは彼の妻君が既に死んでゐたのである。娑婆には彼と、女兒とが殘つてゐた。彼はたいへんな愛妻家であつて、妻君に死に別れてからも、短歌や詩に託して妻君を想い偲ぶのであつた。この妻君の心靈を彼は呼び出したのである。

これが彼に大きな歡喜を與へた。靈媒の肉體を通じて話しかけて來る相手は、たしかに亡妻の心靈に違ひなかつた。別の言葉でいふと、それが彼は亡妻の心靈に違ひないと思つたのである。

彼は自決するまでに、七十數回もその心靈研究會へ通つて、亡妻の心靈と語り合つてゐる。彼は、有能な技術者であり、その方面では勝れた研究を發表し、工場を經營し、多數の工場の顧問として活躍してゐた人物だつた。それほどの彼であるから、靈媒を通じて出て來る心靈が、果して合理的なる亡妻心靈と認めることが出來るかどうかについて、注意を怠らないでゐた。

殊に友人たちから、『それは靈媒と稱する女が讀心術を心得てゐて、巧みに話の辻褄を合はせてゐるのだよ。しつかりしろ』などといふ抗議に對して、彼はさうでないことを證明してみせた。

『讀心術でない證據がある。この前、僕の全く知らない事實を、妻は私に語つた。生前のことであるが、僕には内緒で、妻の妹にルビーの指環を買つてあたへたといふ話が出たのだ。そこで僕は、親類へ立寄つて、そんな事實があるかどうかを尋ねた。すると、確かにその事實があつたことが分つた。但しルビーではなくてサファイアだつたがね。しかしこれ位の些細な喰ひ違ひは、心靈實驗にはよく起る普通のことなのだ。とにかく靈媒が讀心術を使つてゐるものとすれば、この指環の件なんかは、僕の記憶にない知らない事實なん

だから、靈媒が話に持ち出すわけはないんだがね』

かういふことが、彼を心靈研究に深入りさせる一つの階程になつたことは明白だ。それ以後は、彼はますます熱心に心靈研究會へ通ふやうになつた。

彼の亡妻の心靈が乘り移る靈媒は、當時靈媒として最高の評判のある人だつた。その人は中年の婦人で、やや肥滿し、青白い艶々とした皮膚を持つてゐた。家は近畿地方に在り、暮しはいいところの有夫の婦人であつたが、出張の日がかなり多くて、鄕里には殆んど居ないやうであつた。

この靈媒女は、始めの頃は、夜間に限り招靈實驗を引受けた。部屋は電燈を消し、うす赤いネオン燈一個の光の中で、實驗をした。指導者の手を借りてでないと、彼女は無我の境に入ることが出來なかつた。

右に述べた愛妻家の友人は七十何回もこの靈媒女を通じて亡妻と語り合つたが、その後半に至つては、靈媒女は指導者を必要とせず自分で無我の境にはいれた。從つて第三者たる指導者も不用で、靈媒と例の友人の二人だけが對座して、綿々たる夜語りに時間を送つたのである。

その友人は、にこやかな顏を私に向けて、語つた。

『僕と亡妻の對談時間は一時間以上かかるのでね、主事は一番後につてくれといふ。だから始まるのは、いつも夜の十時頃になる。二階の部屋には、靈媒と僕の二人だけだ。ほんとに心おきなく、しんみりと樂しい對談が出來るのだ。妻はいろいろと思ひ出して、喜んだり懷しがつたり泣いたりする。僕は今幸福だよ』

私は質問した。

『そんな甘つたるい話を續けて、靈媒さんに恥かしくないのかい』

すると彼は應へた。

『靈媒が居るなんて、そんな意識はないよ。亡妻と僕と二人切りの世界なんだ。二人がどんな甘つたるい話をしようと、氣がねは全くないんだ。だから妻も、昂奮してくると、僕の方へ凭れかかつて來るよ』

『それはたいへんだね。靈媒が倒れて、目をさましやしないかい』

『手をしつかり握り合つてゐるから、そんな心配はない』

『ふーン、それはどうも』

私は、靈媒と手を握り合つて語らふなどといふ心靈實驗があることを、この時始めて耳にしたので愕いた。

それにしても、この友人の代りに、私がさういふ狀況でもつて、脂ぎつた女の靈媒と喋々喃々の時間を、他に人氣のない夜の部屋で續けてゐたら、俗人らしい間違ひをしでかしたかも知れないと思ふ。

とにかく、その友人は、やがて自殺した。自殺するよ、と彼は私たちに豫告してゐた。しかしそれはにこにこと冗談めいて語られるので、誰も本當にしなかつた。

もしもその時、もつと深く友人の家庭の事情や、心靈研究會や靈媒との關係を深く知つてゐたら、私たちは彼の計畫が本物だといふことを知つて、警戒したことであらうが、そこは手ぬかりがあつた。

自殺する少し前、彼はいつもより少し落着かない態度で、私たちに言つたことがある。

『妻がね、あなたはなぜ早くこつちの世へ來て下さらないんですと、恨めしさうにいふんだ。妻は、今では僕を一刻もそばから離したくないらしい。折角心靈を呼び出して、妻を救つたつもりだつたが、

今は反つて妻を煩惱に追ひやることとなつた。僕は責任を感ずるよ』

彼が自殺したとき、亡妻の忘れがたみの女兒を道伴れにした。私たちは、その自殺の場所である千葉縣の某海岸へ赴いて、哀れな親子心中の有樣を見た。

悼しいのは、その女兒が、小兒麻痺症であつて、學齡期を相當過ぎてゐるのに登校をさせることも出來ず、親類中で同情してゐたといふことを、其の時始めて知つた。私たちには、さうは語られず、七歲の女兒が居るのみ知らされてゐた。

彼が死んで、新聞にも大きく記事が出、もちろん心靈研究會へも傳はつた。私たちは、その後、その會へ行つてみた。

そのとき、靈媒にも會つたが、彼女はたいへん狼狽して、

『私は、實驗が終つてから、あの方に、いくども御注意したんです。どうかお間違ひをなさらないやうに。亡くなつた奥さんがどんなことを仰有らうと、あなたは自殺なんかなすつてはいけませんよと、懇々と御注意しておいたんですがね』と、殘念がつた。

會の主事は主事で、澁い顏を振りながら、『どうもわしたちの見てゐたところでは、あの方は少し深入りしすぎて居られるやうぢや、間違ひがなければいいがなと、心配してゐたところへ、こんどの事件です。おどろきました』と、述懷した。

友人の遺書には、『いづれ次の世界へ行つたら、心靈科學を確立し、君たちに對して通信を行ふから、待つてゐるやうに』といふことであつた。だが、彼の死後、もう十五年以上の歲月が流れたが、今もつて彼からの靈界通信に接しない。

近來、心靈研究が又盛んになつて來たといふ話を聞く。今度流行りだしたものは、私が先に經驗したものとは、又色合の變つたものであらうと思ふ。

私のやうな淺學菲才な者には、果して心靈が存在するのやら、靈媒が本物かインチキか、そのいづれか分らない。しかし本物の靈媒も時には商賣氣が出て尻尾を出したり、俗人に戻つたりするのではなからうかと思ふ。

また心靈の見せる物理化學的實驗は、決つて暗室でやることになつて居り、實驗のお膳立も心靈又は靈媒の側のみで要求するが、これは本當に證しを立てるつもりなら、白晝の實驗にしなくてはならず、實驗のお膳立も理化學者に委せるのがよろしく、さうでなくては本格的の心靈實驗は確立するものではないと思ふ。これらの點が、石原純博士や、現存の某博士たちに心靈研究會から手を引かせた根本的原因である。

新しい心靈研究は、どの方向へ行く。どんな形でお目見得するか。興味は依然として存在するのだ。

——完——

青空文庫情報

底本：「海野十三メモリアル・ブック」海野十三の会
2000（平成12）年5月17日第1刷発行
初出：「宝石」
1949（昭和24）年8月号
入力：田中哲郎
校正：土屋隆
2005年1月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心靈研究會の怪

海野十三

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/